法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-30

# なぜダブリンか？

田澤，耕

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
52
(終了ページ / End Page)
56
(発行年 / Year)
2011-04-01

Hosei University Repository

essay

# なぜダブリンか?

田澤　耕

私の専門はカタルーニャ語である。カタルーニャ語はスペインのカタルーニャ、バレアレス諸島、バレンシアなどで話されている。（以下、これらのカタルーニャ語圏を「カタルーニャ」と単純化して書く。）これまで20年以上、カタルーニャとその言語、文化について研究してきた。にもかかわらず、法政大学に来て第1回目の在外研究先にアイルランドの首都ダブリンを選んだ。なぜか？　ひとことで言うと、「相対化」の必要性を感じていたからである。何事も一つのことばかりやっていると、そのことには詳しくなれても、世界の中で自分がどの位置にいるのかということがわからなくなってくる。これは非常に重要だ、と思う事象にでくわしたとしても、その「重要だ」という判断自体が独りよがりである可能性がある。ほかの場所ではごくありふれたことなのかもしれない。

カタルーニャはスペインという国家に含まれていて、国家全体の公用語であるスペイン語と独自の母語カタルーニャ語が公用語となっている。その研究を相対的に見直すためには、同じような2言語使用状態にある場所を選ぶのがいいのではないかと考えた。とはいえ、二つのうち少なくとも一つは自分がある程度使える言語でなくては、実際

Hosei University Repository

上無理である。そこで浮かび上がったのがアイルランド共和国であった。アイルランド共和国が２言語国家であるということを知っている人はかなり多いと思う。ケルト系のアイルランド語と英語である。しかし、アイルランドの第一公用語がアイルランド語であるということを知っている人は少ないのではないか。

母語以外のもう一つの言語が、英語という世界的な大言語であることも都合がいい。なぜなら、カタルーニャ語と併用されているスペイン語も世界有数の大言語だからである。アイルランド語もカタルーニャ語も、大言語の強大な圧力に常にさらされていることになる。

こうして行く先が決まった。しかし、在外研究である以上、ただ見物に行くというわけにはいかない。どこかの研究機関に受け入れてもらい、できれば指導を受けたい。その受け入れ先探しが最初の難関であった。

カタルーニャには長年の縁で、在外研究のために受け入れてくれそうな場所はたくさんあった。しかし、アイルランドに知り合いはまったくいない。東京のアイルランド大使館をたずねたり、いろいろ調べた結果、ダブリンには有力な大学が三つあることがわかった。トリニティ・カレッジ、ユニバーシティ・カレッジ・オブ・ダブリン（UCD）、ダブリン・シティ・ユニバーシティ（DCU）である。この順番で歴史が古い。トリニティ・カレッジは格調高く、私のようなアイルランド研究の新参者はとうてい受け入れてくれそうもない。UCD は最初の感触はよかったのだが、それっきり連絡が途絶えてしまった。

もし DCU の国際文化学部長ジェニー・ウィリアムス博士がいてくれなかったら、私の留学先探しはかなり難航していただろう。ウィリアムス博士は、何の義務も課さずに、私を受け入れてくれた。その上、細かい心遣いを見せてくれた。たとえば夜遅く、家族連れで私が

Hosei University Repository

ダブリン空港に着いたときには、DCU の日本人教授が出迎えに来てくれていた。ダブリン空港は、日本の地方空港のように小さく、照明も乏しい。降りそぼるアイルランド名物の霧雨の中、我々だけであったらどんなに心細かっただろう。さらには住居が決まるまで DCU の VIP 宿泊施設に泊まる手続きもしてくれてあったのだから、至れり尽くせりと言っていい。アイルランド人の人情深さというものは滞在中にずいぶん経験したが、これがその始まりであった。

DCU はとても小さな大学だ。歴史もほんの 30 年ほどしかない。キャンパスは、ダブリンの中心からかなり離れた寂しい場所にあり、施設もそう立派とはいえない。しかし、ウィリアムス博士には、なんとか先行する大学に追いつき、追い越したいという気迫が感じられた。何の縁もゆかりもなかった私を呼んでくれたのも、そのことと関係があったということを後から聞いた。教授陣の中に、カタルーニャ人がいて、私の業績を見て推薦してくれたのだった。言語や文化をまたいでいろいろ研究をしている人が来れば、アイルランドと直接関係のある研究業績がなくとも、ほかの教員や大学院生たちの刺激になるだろう、と決断してくれたのである。

その期待に十分に応えられたかどうかあまり自信はないが、私の方は、十分に成果の挙がった在外研究であった。言語というものは、使用する人間がいてはじめて存在し得るものである。いくら本で読んでも、実際にその言語を使う人々の間に暮らしてみなければわからないことがたくさんある。

最も強く印象に残ったのは、第一公用語であるはずのアイルランド語を、首都ダブリンで使っている人はほとんどいないということである。道路標示や公共機関の名前などは確かにアイルランド語と英語の両方で書かれている。しかし、大学、息子が通う地元の高校、商店、劇場、パブ、レストラン、交通機関の中、警察などの役所、友人間の

Hosei University Repository

集まりなどの我々の行動範囲のいずれにおいても、地元の人々同士がアイルランド語で話をしている場面を目撃することはできなかった。

ダブリンで唯一、アイルランド語が実際に使われているのを見ることができたのは、公的なアイルランド語使用推進機関であるForas na Gaeilgeの事務所であった。ただし、ここでも宅配便の配達人など部外者とは英語で話をしていた。

アイルランド西部のゲールタハトへ行くと、事情はかなり異なる。実際にゲールタハトを旅行したときには、アイルランド語のみの交通標識にも出くわした。また、アラン諸島のイーニッシュモア島で観光バスの運転手や土産物屋の女主人（いずれも年配者）にたずねたところ、アイルランド語が日常言語であるという答えが帰ってきた。女主人は、自分が家族に英語で話したら、気が変になったのではないかと思われるだろうとまで言っていた。また、校庭でアイルランド語を使って遊ぶ小学生たちを見ることもできた。

カタルーニャのバルセロナは、カタルーニャの中でもカタルーニャ語の使用度が低いことで知られているが、それでも、あらゆる社会的場面でカタルーニャ語が使われている。社会の中でカタルーニャ語が生きているということを確認するのになんの苦労もいらない。カタルーニャ語の使用度は地方へ行けば上がり、ほとんどカタルーニャ語しか聞こえてこない村はいくらでもある。カスティーリャ語を話すことに困難を感じる人さえそうめずらしくはない。

この程度の皮相的な比較でさえ、現地で現実を自分の目と耳で確認していなければ確信を持って書くことはできなかったであろう。

アイルランド滞在中の経験とそれについての考察をまとめた論文は、すでに「異文化」に掲載した。また、カタルーニャの学術誌Serra d'Orにもカタルーニャとアイルランドの言語状況を比較した論文を発表することができた。しかし、何よりも大きな成果は、当初の

Hosei University Repository

目論見通り、以前と同じようにカタルーニャ研究をしていても、それを客観的に判断できるもう一つの視座を持っていると感じることができるようになった点だと思う。ダブリンを選んだことは間違いではなかった。